
罪人のサーカス

桜川 茜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪人のサーカス

【Nコード】

N8900S

【作者名】

桜川 茜

【あらすじ】

私はこのサーカスの案内人、今日もいろいろな人間をこのサーカスへと導く。

このサーカスは男女年齢なく入れます。

でも、入ったら・・・

序章

ようこそ！

×××××のサーカスへ！

私はこの案内人です。

今からサーカスの説明をしますね！

このサーカスには7匹の動物が登場します。

1つ、ヘビ

2つ、キツネ

3つ、オオカミ

4つ、クマ

5つ、ライオン

6つ、ブタ

7つ、ヤギ

あなたは・・・

すべての動物のショーを見れますよ。

全部？すごいなあ・・・

なにか、言ったか？って？

なんにも言っていないですよ。

あー、あの・・・

嬉しいですか？

・・・そうですか。
「うれしい」と。

別に悪くはないと思いますよ。
気を取り直して！

あ、このサーカスのルールをお伝えしますね。

1つ、動物たちには危害をくわえないでください。

2つ、静かにショーを見てください。

3つ、ほかの観客の皆さんとは仲良くしてください。

4つ、客席では飲食禁止です。

5つ、子供もいます、下品な行動はしないでください。

6つ、ほかの観客の迷惑にならないようにしてください。

次は特に重要です？

7つ・・・

自分が誰なのか全力で探してください。

わかりましたか？

なら、よろしい。

では、いつてらっしゃい！

×××××のサーカスへ！

* * *

僕は見知らぬサーカスの入口にいた。

そして、「案内人」という人から突然、

「ようこそ！×××××のサーカスへ！」

と、言われたわけがわからない。

で、そのあと「案内人」がサーカスにでてくる動物たちの話をして、
「あなたはすべての動物のショーを見られますよ！」

と、言われてから

「うれしいですか？」

って、言われたから素直に「うれしいです。」

で、答えたんだよね。

でも、案内人はあんまりうれしそうなさそうだった。

なんでだろう？

普通うれしくない？

だって、自分たちが主催するサーカスなんだよ？

嬉しい、って言われたら・・・

嬉しくなるよね？なんでだろう？

まっ、いつか・・・。

それでね、案内人からサーカスのルールを聞いたんだ。

6つ目までは、普通のルールだったよ。

でもね・・・。

最後のルールがね。

「自分が誰なのか全力で探してください。」

だってさ、意味わからないよ。

自分のことなんか！知ってるに決まってるじゃないか！

じゃあ、君の名前は？だって？

ええっと・・・、あれ？なんだっけ？

僕の名前は？ロビン？クリス？ジャニス？

違う！違う！じゃあ、なんだ！僕の名前はなんだ！

わからない・・・、わからないよっ！

じゃあ、どこから来たのかって？

・・・どこ？

僕は・・・。どこから・・・来たんだっけ？

僕は・・・僕は・・・僕は・・・ボクハ？

アレ？ボクハ・・・ダレ・・・ダレダロウ・・・？

序章（後書き）

初投稿！

なんか、おかしなところあったらいつてくささい><

へびの章 ? (前書き)

タイトルまた、変えてしまつてすみません……
もう、変えません。

へびの章 ？

「いこうか？」

僕はニコツと微笑み目のまでカタカタ震えている一人の女性に手を差し伸べた。

その女性は僕を見上げてこういった。

「はい・・・、ロベニア様。」

女性は僕の差し伸べた手をとった。

僕はその女性の手をひっぱりあげその女性を立たせた後、

まだ涙を流し震えているその女性を抱き上げ、僕は歩き始めた目の前の玉座に向かってー。

*

*

*

「アリリア様！どこにいかれるのですか！？もうすぐ、パーティが始まりますわよ！？」

20代後半くらいの女性が今まさに森の中に入っていこうとする、

アリリアの背に声をかけた。

アリリアはうるさそうにこういった。

「うるさいなあ、どーせあのムカつく顔をした、おっさんの自慢話大会でしょう？そんなの行く意味ないわよっ！？」

アリリアはイライラとした不機嫌な顔でフンツ！とそっぽを向いた。20代後半くらいの女性・・・ロリアはため息をつき、

「アリリア様、ムカつく顔をした、おっさんはないでしょう？仮にもここベリシエル王国の国王様なんですよ？第一に今日は国王様の自慢話大会ではありません。国王様のご長男であります。ロベニア様の十五歳の生誕祭です。」

ロリアはほつつと息を吐きいきった。

「ロベニア様の生誕祭でも嫌なものは嫌なの！いい子ぶりっこはもう疲れたわ……。」

アリリアは自分がパーティーでいい子ぶりっこをしているところを思い出したのか、

かすかに顔をしかめた。

しかし、また不機嫌そうな顔をし、森の中に逃亡しようとしていたと、その時。

「アリリア、そんなところで何をやっているんだい？早く支度を済ませてしまいなさい？」

ロリアの後ろからやってきた大きくたくましい男の人の声にアリリアはパッと顔を輝かせたかと思ったが、慌てたようにまた不機嫌そうな顔で

「お父様、もう、パーティーは嫌です！いい子ぶりっこには疲れましてわ！」

アリリアはまたフンツとそつばを向いた。

そんな、アリリアの態度に苦笑をしつつ、

「まあ、そういわずに……。おっ、そういえばさつき、料理長のルベニがパーティーから帰ってきたときにアリリア様の好物のシフォンケーキが焼きあがるようにして午後のお茶会をしませんか？と言っていたなあ、でも、アリリアがパーティーにはいかない。というならつくらないどころかしら？とも言っていたなあ……。」「

そういうとアリリアをチラッと見た。

アリリアはブルブル震えたかと思うと……

「そういうことなら、仕方ありませんね。ルベニのためにもパーティーに行つてさしあげましょう。」

アリリアはコロツと態度をかえ、ロニアに声をかけた。

「さあ、支度の続きを済ませましょう、ロニア。」

と、言うとお城に向かって歩き始めた。

ロニアはあきれたように、

「まったく、アリリア様は現金なんだから。」

と、言って苦笑していた。

「とにかく、パーティには行く気になったようだからよかったよ。」

「そうですね。さて、私もアリリア様の支度の続きに行つてまいります。パーティでしっかりアリリア様を見張っていてくださいね、旦那様。」

「わかつている。」

ロニアはアリリアの後を追うように小走りにさつていった。

「さて、アリリアも支度に行ったことだし、俺もそろそろ出かける準備をするか・・・。」

アリリアの父も城に向かって歩き出したのだった。

へびの章 ? (後書き)

誤字・脱字がたくさんあると思いますが・
暖かい目でみてください。 > <
感想書いていただけたらうれしいです ^^

へびの章 ? (前書き)

かなり変えました！

へびの章 ？

「じゃあ、いつてくるわね。いい子で待つてるのよ、ダレン？」
アリリアはそういうとダレンの頭を軽く撫でた。

「うん、わかってるよ、アリリア姉ちゃん！いつてらしゃい！」
ダレンはそういつてすばやくアリリアから離れた。

はつきり言うつとダレンはアリリアに頭を撫でられるのがあまり好きではなかった。

それはアリリアが嫌いというわけではなく、単純に子ども扱いされているのが嫌だっただけだ。

アリリアはそんなダレンの姿が可愛くてついつい微笑んでしまった。
「アリリア様！お早く〜！馬車が出発してしまいますよ〜！」

と後ろからロニアの切羽詰まったような声が聞こえてきた。

「まだ、大丈夫でしょう？」

と、いったアリリアだったが小走りで馬車に乗り込んだのだった。

* * *

ベリシエル王国はヴィアル地方の中でも力が弱い国だったが魔法使いの住む国、として知られていた。

魔法使いは今の世ではかなり珍しい、世界中で見ても15人いるかないくらいというほど。ベニシエル王国はその約半分ぐらいの七人の魔法使いが国に在籍していた。魔法使いは魔法使いといっても全員が同じ実力ではない、魔法使いでもそれぞれランクがあり、上級・中級・初級というようにわかれていたベニシエル王国の魔法使いたちはほとんどが初級〜中級だった。

そういえば、1回ロベニア様にも魔法がある。という噂があったが、すぐに嘘だとわかりそのうわさは3か月で消えていったこと

があつた。しかし、今でも、国民は噂の種がなくなるとその噂について語ることがある。

魔法使いがいる国、ベニシエル王国。力は弱いが知名度はかなりある。ヴィア又国の国王ヴィクトル・アンダーソン、アルガス王国の国王ユルバン・エイリング、砂漠の向こうにある、ゼブル王国の国王イヴォン・バスカヴィル、ヴィアル地方でもっとも力のある大商人クロード・オーウエン、世界の英雄ラルフ・ベルグホルムなどのそうそうたる顔ぶれはこの国の知名度がいかにあるかを示していた。しかも、今回はヴィアル地方でもっとも力が強い国、リバリス国の国王シルヴァン・ベドゥナルスキーが来ていた。いつものパーティならリバリス国の大臣ブレア・ブラッドレイが来るのだが今日はなぜか国王が来ていたのだ。それほど、ロベニアの生誕祭・・・ベニシエル王国の王位継承者の生誕祭というのは力を持っていた。

「今日はかなり力をいれてるわね・・・」

アリリアはいつもよりさらに豪華に装飾された部屋を見回しながらそうつぶやいた。

アリリアの父・・・アルフォンソも口では言わなかったものの心の中ではアリリアと同じことを呟いていた。二人がそう思っていると騒がしい会場で突如声が響いた。

「王陛下とロベニア様のご登場です。」

ガヤガヤしていた会場がだんだん静かになっていき、完全に静かになったときに王陛下とロベニア様が入ってきた、堂々とそれでいて静かに・・・。

玉座の前で止まった二人は会場にいた人々を見回した。そして、ロベニアはニコツと微笑むと

「今宵はよくぞ私の生誕祭に来てくれた！私はうれしく思う！私は堅苦しいパーティは嫌いだ、だから今宵は私の生誕祭だからといって遠慮せず浮かれ騒いでくれ！」

そついうとロベニアはまたニコツと微笑み王陛下と一緒に玉座に座った。

アリリアはじょじょにもとの騒がしさを取り戻してきた会場ではかの貴族に挨拶しにいくアルフォンソについて行った。アリリアはイヤヤながら笑顔（作り笑い）を浮かべ、挨拶に行った。「こんにちは、ジャスティン公爵」「こんにちは、ライオネル公爵」「こんにちは、シルヴァン様。お元気ですか？」などと挨拶していったアリリアとアルフォンソは最後に王陛下とロベニア様に挨拶をしに行った。

ちなみにこのベニシエル王国には現在王妃がいない。それは、なぜか？今は、話さないでおこう・・・。

アリリアは笑顔（作り笑い）が崩れてきていることを感じていたが王陛下とロベニア様の前で崩れた笑顔を見せるわけにはいかない。アリリアは最後の力を振り絞って極上の笑顔（極上の作り笑い）を作ったのだった。

へびの章 ? (後書き)

アリリアはけっこう無礼かもしれませんがw

あと、パーティとかいったことないんでこんな感じかな? って思っ
て書いたのだからグダグダだと思います><ごめんなさい……)

王への挨拶のことか)

もうちょっとうまく書けたらいいんですけど……

へびの章 ？

王陛下とロベニア様への挨拶が終わったアリリアはやっとアルフォ
ンソに解放してもらい、今は夜風にあたるためバルコニーにでてい
た。

「はぁ・・・、疲れた・・・」

思わずため息が出てしまう。本当はこんなとこ来なくなかった、お
城でのんびりしていたかった、とアリリアは思った。

「はぁ・・・もう、笑顔の作りすぎで顔がこわばってるわ・・・」
また、ため息をつきながら顔をムニムニしだすアリリア。

ムニムニ、ムニムニ、ムニッ！

すると、後ろのほうからクスクスと笑う声がした。

「クク・・・ククク・・・」

「・・・誰？」

不機嫌な顔で後ろを向き尋ねるアリリア。

すると、笑っていた人物はクスクス笑いをやめて、

「ん？あぁ、ごめんね笑っちゃって。君がすごく、おもしろくてさ」
と、言った。アリリアはその言い方と内容にイラッとして。

「そんなことを聞いてるんじゃないですわ！あなたは誰ですか？と
聞いているんです！」

と、言った。

「僕が誰か？んー・・・、誰だと思う？」

その人物は悪戯っぽくニヤツと笑いながら訪ねてきた。

「私がしるわけないでしょう！？」

アリリアはイライラっとして、つい、大きな声を出してしまった。
アリリアがしまった！と思った時にはすでに遅く会場にいた人々は
びっくりして二人を見ていた。

人の視線がとても痛い。

「まあ、どうしたんでしょう?」

「あら?あそこにいるのはアリリア嬢ではないかしら?」

「あんな大きな声を出して・・・」

「迷惑だわ」

「アリリア・・・!シフォンケーキは抜きだ・・・」

「アリリア嬢の隣にいるのはまさか・・・?」

会場にいる人々がブツブツと囁きあっているなかアリリアと謎の人物はそれぞれこのピンチから抜け出す方法を考えていた。もっとも大勢の人に見られることに慣れていないアリリアは完全に固まってしまうていたが。

しかし、このようなことになってしまった原因(?)の人物はブツブツと、

「あゝ、どうしよう。・・・でなんとかできないかな。んー、むりかなあ?」

アリリアが困ってる様子をチラッと横目で見ながらへんなことをブツブツ言っていた。

何度かブツブツ言っていた後何かを決心したようでアリリアに向かつて

「ちょっと走るよ?」

と、言ってアリリアの手を取り走り出した。

アリリアはまだ、冷静さを取り戻していなかったので、つれられるままその謎の人物について行った。

* * *

ハア、ハア、ハア、ハア、ハア。

「……ちよつと！いつまでひっぱるのよ！」

アリリアは謎の人物の手を振りほどきどなった。

ちなみにアリリアは思考は走っている途中でどンドン戻ってきていた。

謎の人物は急に手を振りほどかれたのにちよつと驚いた様子だったが。

「ここまで来たら大丈夫だね」

と、アリリアに向かってニツコリと微笑んだ。

「大丈夫だね。じゃないわよ！ここはどこ？はやく私を元の場所に戻しなさい！」

アリリアは謎の人物に向かって怒鳴った。

「ひどい言い方だなあ。一応僕はあの場から君を連れて逃げ出してきたあげたんだよ？」

「ー！？あげた！？もとはと言えばあなたが悪いでしょう！？なのに……！」

「えー、でも、君があの場で怒鳴らなかったらこんな事態にはならなかったよ？」

「う……まあ……確かに……そうだけど……でも、あなたが私を……その……」

痛いところをつかれて急に勢いなくなるアリリア。

「まあ、僕も悪かった所があったし……お互い様ってことでいいんじゃない？」

そういつてまた、ニツコリと笑った。

アリリアはまだ、納得いかない感じがしたが、さっきの悪戯っぽい笑顔じゃなくてただ純粹に仲直りを求める笑顔だったので小さな声で。

「うん……」

と、言った。

「あっ！そういえば、僕の名前を言ってなかったね。僕の名前はレヴァンだよ」

「わたしはアリリアよ。まあ、知ってるでしょうけど」
レヴァンはニツコリ笑っていたが、アリリアはちょっとツンツンした態度をとっていた。

* * *

この光景を「観察の魔法」で苦々しく見ている人物がいた。
その人物は「観察の魔法」の発動をやめると部屋の中にいたもう一人の人物に向かって言った。

「レヴァン様はアリリア嬢とシベルルの森にいらっしゃいます」

「そうか・・・」

「で、どうしましょうか？今すぐ「転送の魔法」を発動してお二人を連れ戻すこともできますが？」

「・・・いや、いい。何もするな」

「かしこまりました。では、失礼させていただきます」

「ご苦労だったな」

魔法使いが頭を下げて部屋から出ていくのを確認したとたん部屋にいたもう一人の人物は大きなため息をついた。

そして、シベルルの森の方角を見て。

「・・・レヴァンめ」

と、つぶやいた。

へびの章 ? (後書き)

恋愛系じゃないですよ！

今回も文法ダメダメ&読みにくくてすみません・・・orz

へびの章 ？

僕は知りたい。

自分が生まれてきた意味を。

なぜ、今も生きているのかを。

誰か、教えてくれ。

もしも、神様という存在がいるのなら・・・少し、少しだけでいいんだ。

僕に慈悲を・・・。

* * *

暗い森の奥二人の男女が佇んでいた。

そのうちの一人・・・アリリアが隣にいる男性・・・レヴァンに問いかけた。

「・・・で？レヴァン？」

「なんだい、アリリア」

「いつになったら私をお城に戻してくださるのでしょうか？」

「そのことなんだけどね、アリリア・・・実はね・・・」

「・・・なんででしょう？」

アリリアは困った顔をしているレヴァンの顔を覗き込んだ。

「・・・ここがどこか・・・僕にもわからないんだ・・・」

アリリアはいぶがしげにレヴァンを見た。

「魔法だよ」

「・・・面白い冗談ですね、レヴァンさん」

レヴァンがそういった瞬間にアリリアは冷めた目でレヴァンを見ながら言った。

「・・・本当なんだけど・・・」

「じゃあ、証拠を見せてください」

アリリアは冷めた声で言った。

「しょうがないなあ・・・」

レヴァンはため息をつく、小枝に魔法をかけ始めた

「小枝よ、私の命により形を変えよ！お前は、今から、リスになるのだ！」

すると、レヴァンの前にあった小枝は形を変えて、レヴァンの言うとおり・・・

リスになったのだ！

「ウ・・・ウソ・・・」

アリリアはポカンと口を開け、ぴよこぴよこと歩き始めたリスを見た。

「え・・・？ホ・・・本当に・・・？ま・・・まさか・・・！」

レヴァンはというと得意そうにアリリアを見た。

* * *

一人の魔法使いは言った。

「こいつをすぐに殺してしまえ！こいつは我らの国を災害を呼ぶ寄せるものだ！」

一人の魔法使いは言った。

「殺してはいけない！この子は災害を呼ぶものではない！この子のきつと将来、

この国を救ってくれる存在となろう！」

一人の魔法使いは言った。

「殺してはダメだがこのままでもダメだ。この子は……」

審議。一人の赤ん坊の運命が決められる。

殺されるか？ 生かされるか？

国王は静かに言った。

「この子は殺さない。しかし、この子には生涯「自由」というものはあたえられない！」

赤ん坊は生かされた。

しかし、この先の運命を考えると……

赤ん坊は……生かされて、嬉しいだろうか？

*

*

*

僕はいけないとわかっていても魔法を使ってしまった。でも、あの
人から

「緊急事態には使ってもいいだろう」

と言われていたから大丈夫だと思う……。そうであってほしい。
でも、怒られ、罰を受けることになってもいいと思った。

彼女のこんな面白い顔を見られたのだから。

彼女は面白い。コロコロと表情を変える。

・・・僕とは真逆だ。

へびの章

？（後書き）

話が急展開すぎかもですね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8900s/>

罪人のサーカス

2011年10月8日19時04分発行